

第26回 町田市認知症施策推進協議会 議事録

日 時：2026年2月16日（月）17:30～19:30

場所：町田市庁舎10階10-3、10-4会議室

出席者：中谷陽明、栗田駿一郎、村山秀人、糟谷英俊、宮地英雄、土屋孝治、井上俊
星野晃、長谷川昌之、内山加奈絵、臼井亨、浅沼芳征、井上美恵子、
認知症である者2名

欠席者：玉利裕子

【順不同、敬称略】

傍聴者：7名

資料1-1～資料1-2 「2025年度町田市の認知症施策の実績について」

資料2 「2026年度の町田市認知症施策推進協議会の開催スケジュールについて」

資料3 「2026年度町田市の認知症施策の計画（案）について」

資料4-1～4-2 「認知症支援に関するニーズについて」

資料5 「認知症の人の社会参加の推進について」

資料6 「認知症の人の家族等への支援について」

資料7 「認知症疾患医療センターの2025年度実績報告について」

資料8 「各委員からの報告」

開会挨拶

- ・早出課長より挨拶

1 報告事項

(1) 2025年度町田市の認知症施策の実績について 【資料1-1～1-2】

・説明 〈事務局〉

・質疑応答

〈井上 俊委員〉認知症月間に、ペDESTリアンデッキで行われているライトアップは、オレンジ色に光っている理由を、市民の皆さんが分かるように表示されているのか教えていただきたい。

〈事務局〉認知症月間の取組としてオレンジ色になっているということを、市民の方がわかるように現地に表示をしている。合わせて市のホームページや「広報まちだ」でも周知を行っている。

〈長谷川委員〉質問が2点ある。

1点目として、前回、認知症地域支援推進員連絡会で話し合われている内容を教えていただきたいので、可能であれば議事録等の共有をお願いしたいとお伝えし、それに対しては検討

したいという返答であったが、検討しその後どうなったか知りたい。Dサミットやワークショップに携わっているなかで、認知症地域支援推進員の方から、意見をいただくことがあった。認知症地域支援推進員連絡会で話し合われて、どのような意見が出たのか、どのような思いがあるのかぜひ知りたい。前回もお伝えしたとおり、認知症地域支援推進員連絡会での議事録等の共有をしていただきたい。

2点目が認知症初期集中支援チーム事業についてで、以前の協議会の際に栗田委員が、数が増減していることに関して、同程度の地域資源がある他市と比較することで、町田市だけの特異な状況なのか、それともほかの自治体でも同じような状況なのかということを確認してはどうかといった話があったが、現在の確認状況を教えていただきたい。

〈事務局〉まず1点目、Dサミットやワークショップについては、推進員連絡会の中で市の取り組みとして、共有し、推進員の皆様から意見をいただいている。いただいた意見は市でまとめて、各事業に活かしている。

〈長谷川委員〉認知症地域支援推進員の方から意見が上がり、この協議会で協議をしていくものなのではないかと思う。本日の協議事項で「認知症施策の計画(案)」についてとあるが、協議を行う場合も、認知症地域支援推進員の意見が参考になるのではないかと考えている。

〈中谷会長〉前回長谷川委員から議事録やメモを共有できないかという意見がありましたが、そのあたりは難しいのか。

〈事務局〉認知症地域支援推進員連絡会は、議事録を作成すると定めているものではないため、連絡会の意見を市が取りまとめ報告させていただいている。

また、この協議会にお諮りする内容は、市で判断している。その際は、認知症地域支援推進員の意見を踏まえて、資料を作成している。

〈事務局〉2点目の初期集中支援事業の件数について、同様な人口規模の自治体と比較を行った上で検討したかという質問だが、市内の傾向、件数、割合を分析しているところである。同様の人口規模の自治体との比較はまだできていない。いただいたご指摘をもとに、引き続き検討、精査を行う。

〈栗田委員〉

2点あり、1点目は、認知症サポーター養成講座についてである。ステップアップ講座の実績について、2025年度に4回実施し、63名が受講をしたと記載されている。チームオレンジやキャラバン・メイト、認知症サポーターや、認知症サポーターステップアップ講座といった地域の方に参加いただく名称や役割が多くなっている中で、このステップアップ講座を受けた方々に、どんな形で活動に参加していただいているのか伺いたい。

2点目は意見である。先ほど長谷川委員からも意見があったとおり、町田市の認知症関連の活動に関わっている方々の市の施策に対する意見はとても重要だと思う。協議会は計画に向けた承認事項が多くなってくるため、綺麗な議事録ではなくても、コメントを集めたような非公開資料という形で協議会の委員の中で閲覧し、具体的な話し合いができる機会があるとよいのかと思う。これは、長期的な会議のあり方というところでの意見である。

〈事務局〉1点目について、認知症サポーターステップアップ講座は、認知症サポーター養成講座受講後、さらに認知症のことを知りたいという方が受講する講座である。ステップアップ講座受講後の人も含め、認知症サポーターには、Dサミットや、地域で実施している認知症関連のイベント等の情報を流し、希望者が興味のある活動に参加できるようにしている。

〈中谷会長〉2点目については、長谷川委員の発言に合ったように、できれば書面化したものがある方が議論しやすいと思う。

〈認知症である者 委員①〉Dサミットに参加し、登壇して話をした。イベントの開催結果はどのように知ることが出来るのか。

〈事務局〉現在Dサミットの来場人数や内容の精査をしており、結果が出次第、市ホームページ等で開催状況等の報告をする予定である。

〈認知症である者 委員②〉実際に認知症の人と話をしながら、きっかけを探していくことが大切だと思う。続けていくことで、なにか見えてくるものがあると思う。

〈中谷会長〉正解のない支援になるので、一生懸命考えていくしかないということだろう。

(2) 2026年度の町田市認知症施策推進協議会の開催スケジュールについて

【資料2】

- ・説明 〈事務局〉
- ・質疑応答 なし

2 協議事項

(1) 2026年度町田市の認知症施策の計画(案)について

【資料3】

- ・説明 〈事務局〉
- ・質疑応答 なし

(2) 認知症支援に関するニーズについて

【資料4-1～4-2】

- ・説明 〈事務局〉
- ・質疑応答

〈中谷会長〉3年ごとに町田市高齢者福祉計画・介護保険事業計画を策定するが、そこに(仮称)町田市認知症施策推進計画を一体的に策定するというので、認知症施策推進協議会から、認知症に関するニーズがあれば、お話ししていただくということだが、2024年のときは、①早期受診をして支援に繋げることが必要②若年性認知症の人への就労や就労継続の支援が必要③成年後見制度等の周知が必要という3点だったのか。

〈事務局〉いきいき長寿プラン24-26を策定する際は、認知症とともに生きるというテーマのもと、3点以外に協議会から出てきた課題や、各種調査等から出てきた課題をもとに、

「認知症とともに生きるまちの実現にむけて取組む」と「認知症の人とその家族の支援に取組む」の2本の柱ができた。各種課題から出た意見等を踏まえて、重点的な取り組みも策定された。

次期計画の策定においても、2本の柱を考え、その後重点取り組みを考える過程につなげたいと考えている。その為資料4-2のとおり、抽出した課題を見ての意見や日頃感じられている課題等について幅広く意見をいただきたい。

〈糟谷委員〉抽出した課題の実行はどのようにするのか、実現は誰がするのか。

〈事務局〉抽出した課題をもとに、いきいき長寿プランの重点取り組みに落とし込み、各種目標を定めて実行していく。

実施主体は市が行うこともあるが、地域住民や当事者、医療機関と協力することもあり、さまざまな実施主体があると考えている。

〈糟谷委員〉いかに実行していくかが大切だ。実行の道のを計画に載せないと、実行には結びつかないと思う。課題が多く、計画倒れになり、実行されるか分からないと感じる。

〈中谷会長〉行政計画なので、責任はもちろん市にある。今冊子に書いてあるのは、市が責任を持ってやるということです。

〈事務局〉いきいき長寿プランを策定後、いきいき長寿プランの策定審議会で進捗度や達成状況、実績を評価する。達成状況等を踏まえながら、次回の計画策定に生かす流れになっている。当然その結果、この協議会でも意見をいただき、審議会で諮っていく。

〈中谷会長〉審議会は、認知症だけではなく、高齢者の保健福祉の全体の審議会かと思う。ということは、今のいきいき長寿プランの達成度も報告されてるのだろうか。プランの認知症に関わる部分を今聞いているのだと思うが、どこに取り組みが書かれているのか。

〈事務局〉補足説明として、委員に依頼したいのは、異なる立場での課題認識を聞きたい。この場であがった課題認識に対して、必ず市で何か対策を講じるものではなく、この協議会以外の意見もいただきながら、計画の中で次の3年間、市として認知症支援として何を取り組むのか決定していく。まず入り口として、今出席している様々な立場の意見をいただきたい。市が定めた取り組みについては、先ほど説明した通り、審議会で進捗確認をしております。くつか後ほど報告をする。

〈中谷会長〉本日は認知症支援に関するニーズの①～⑦に対しての意見をいただきたい。

〈栗田委員〉資料の4-1で整理されたものが、新たにいきいき長寿プランの中に組み込む認知症施策推進計画の主な論点になると理解している。そこを踏まえて、具体的な意見を資料の4-2に整理されている。一点付け加えると、市内の小中学校や市内の企業等に対する新しい認知症観の啓発を行っていく必要があるのではないかと。昨今早期診断や早期受診が進まないことも多く、幅広い年代、それからまだ働いている若い世代も含めて啓発することが、新しい認知症観や早期診断という話とうまく接続をしていくためには必要だ。

〈中谷会長〉特に新しい認知症観について気になるが、まだ単なる案で、そのまま審議会に行くわけではないという認識でよいか。

〈事務局〉その通り。チームオレンジコーディネーターの活動や、地域課題の中から、我々が抽出した、案段階の課題である。その他の課題や取組むべきことがあればご意見をいただきたい。

〈中谷会長〉新しい認知症観は何か。中身が分からない。

〈事務局〉認知症基本法が成立し、国が認知症施策推進基本計画を策定した。国の計画の中に、今までの認知症と違う新しい認知症観を取り入れながら施策を進めることが明記されている。今まで支援者だけで検討を行っていた取組を、本人やその周りの家族等を踏まえながら企画立案したり、認知症の人もそうでない人も同じように計画を策定していけるといったことが新しい認知症観に繋がる。町田市においても「認知症に対してマイナスなイメージがあるので、新しい認知症観を持って、本人たちと一緒に考え、認知症とともに生きるまち、認知症に優しいまちとはどんなまちかを考える必要がある」といった意見を多々いただくので、市としてはキーワードとして「新しい認知症観」が、次期計画のいずれかに組み込まれていくべきと考えている。

〈村山副会長〉⑤認知症サポーター活動について、今年度認知症サポーター交流会に参加した際、サポーター活動の発表があり、素晴らしいと感じた。しかし、参加者のほとんどが活動中のサポーターばかりであり、実際に市内の何万人というサポーターに情報が届いていないと感じた。先日開催されたDサミットにも参加し、登壇者の方に認知症サポーターの方がいた。実際に活動の場に出会えなかったり、活動のハードルを高く感じている人もいるが、意欲のある人もいるので、今後多くのサポーターに活躍の場の提供や、既存の活動に参加できる仕組みがあると良いと思う。

〈内山委員〉木曾の「ぼくはぼく」を以前見学し、地域の方が誰でも出会える場所があるところが良いと思った。地域の居場所づくりをしたいという人はいると思うが、町田市から場所の提供や資金の提供はできないのか。実際に勤務している事業所でも、介護者の相談や当事者の話を聞きたい職員がいる。

〈事務局〉市が行う集いの場として、例えばDカフェはスターバックスコーヒーの店舗で開催している。その他各支援センターでも特徴的なカフェが開催されている。例えば南圏域ですと、キッチンオリジンの空きスペースを活用した「オリジンカフェ」や、忠生圏域では「雀のお宿」といったカフェが実施されている。現在、市で直接的な場所の提供や資金援助は行っていないが、各支援センターのアイデアや場の提供の状況を把握しながら、活動できる場所について広く広報していきたい。

〈星野委員〉当センターでも「雀のお宿」というDカフェを月に2回開催している。私が感じる課題としては、Dカフェはそれぞれの地域で、それぞれの事業所や代表の思いで開催しているので、例えば新しい認知症観や当事者の参加については、横のつながりができていかないと、コンセプトに結構なズレが生じてくると思う。なので、横のつながりができるように、Dカフェ連絡会に興味のある人が参加できると、開催のハードルが下がり、内山委員が話したようにやってみたい人も参加しやすくなるのではないかと。

〈井上 美恵子委員〉 家族介護者の支援・相談・交流というところでは、2009 年から私たち認知症友の会で、当事者と家族介護者とサポーターが集まり、交流をしたり相談したりする場を設けている。高齢者支援課にも相談し周知の協力を得ているので、行政と連携できていると感じている。

〈長谷川委員〉 私自身がケアマネージャーなので、本人の意思決定支援に関しては、力を入れてほしいと思う部分だ。そして、これこそ、認知症地域支援推進員が担う部分も多く、認知症地域支援推進員と話し合い、進めていくべきではないか。

〈星野委員〉 認知症地域支援推進員に関しては、各センターに 1 人以上は配置されているが、実際に 1 人でやることはなく、センターの中でチームを組み、概ねの業務を 3 名から 4 名の体制で行っている。高齢者支援センター単独の推進員だけではやりきれない業務があると思うので、行政と一緒に進めていけたらいいのではないか。

〈中谷会長〉 今の話は、認知症地域支援推進員が意思決定支援に関わっているということか。

〈長谷川委員〉 意思決定支援の部分だけではなく、1 から 6 の部分に関しても、実際の実務者になるであろう認知症地域支援推進員が中心となって、周りを巻き込んで進めて行くと思う。認知症地域支援推進員の意見を集約してもらいたい。

〈事務局〉 1 点補足させていただきたい。市で日々の認知症地域支援推進員の活動と情報共有を図るために、2 か月に一度、認知症地域支援推進連絡会というものを開催している。日々の推進員活動の課題等をグループワークで共有したりしている。本日の課題でも挙がっている、家族支援や社会参加についても推進員の意見をもとに挙げている。今回は抜粋したものとなっているが、引き続き情報共有に努めながら、課題の洗い出しをしたいと考えている。

〈中谷会長〉 ただ、推進員の意見という形でまとめられている方が、説得力があると感じる。

〈認知症である者②〉 例えばグランベリーパークなど、レストランや喫茶店がある場に、拠点を作ることはできないのか。常時使えるようなところで、もちろん認知症の人は安くするといったサービスがあるのも一つの案だと思う。そこに行くと面白いよという場があれば、いろんな人が来るかもしれない。企業に協力を仰いでも良いかもしれない。

〈中谷会長〉 とてもいいと思う。スヌーピーミュージアムの隣に作ってもらえると、集まりやすく、目立ちやすいと思う。あの施設は管轄が東京都なのか。

〈事務局〉 ちょうど南町田グランベリーパーク駅には市が D カフェを実施しているスターバックスがあり、店長が認知症施策にとっても好意的で、何か一緒に協力してやろうという声掛けがある。皆様の意見も聞きながら、何か面白いことを一緒に考えていきたいと思う。

〈中谷会長〉 例えば以前議題にあがっていた、レカネマブに関することでスムーズに治療を受けられるようにしてほしいといった内容でもいいのか。

〈事務局（課長）〉 例えば国や都レベルでないと、実現が難しいことは、掲げるだけで実行されないと意味がないので、市として実行できるものを目標値として掲げて行いたいと思っている。意見として、この場で頂く分にはありがたいと考えている。実現の可能性を考え

ながら取り組みを定めていきたいと思う。

(3) 認知症の人の社会参加の推進について

【資料5】

・説明〈事務局〉

・質疑応答

〈糟谷委員〉町田市人口43万人、75歳以上が確か7万何千人。そのうちの3割が認知症か軽症の認知症となると、約2万人いるかと思う。認知症の方を毎日何人も診ているが、やりたいことがなくなるのが認知症と認識している。例えば家で閉じこもってテレビばかり観たり、デイサービスに行くように促してもなかなか行かないといった人が多い。認知症になったら社会参加するのではなく、要するに高齢者全体の話ではないか。

先日もランセットという雑誌に、何が認知症を悪化させるかという記事があった。65歳以上過ぎれば1番の要因は社会的孤立と書かれていた。高齢者を社会的に孤立させない策をいかに町田市がとるかが重要ではないか。85歳以上になれば半分の人が認知症になるので、認知症になってから社会参加ではなく、高齢者全体が社会参加できる方がいいのではないか。例えば各地域のコミュニティで、小学校等を利用し、週1回程度参加できる場を作るのはどうか。どの自治体も同じようなことをしていると思うが、町田市として特徴的で、全国から来るような画期的な策を立ててもらいたい。

〈事務局〉町田市としては、高齢者の介護予防の一環で社会参加を行っている。例えば、「町田を元気にするトレーニング(町トレ)」というものがあり、地域の自主グループの皆さんとともに運動したり、集まることも社会参加と位置付けている。その他、老人クラブや、地域の福祉施設にボランティアに行くいきいきポイント制度といった、様々な社会参加するための取り組みを別途行っている。

〈糟谷委員〉いろいろ取り組んでいると思うが、高齢者7万人のうち、どれだけの人が社会参加できているのか。私が診ている人はほとんど何も知らないと感じる。一部の人に限定されているのではないか。一部の人以上が参加できるような、システムを作ることが重要だと思う。

〈事務局〉確かに高齢者の社会参加の取り組みに対する参加人数は高齢者全体でいうと少ないので、引き続き周知活動を行いたい。

そして認知症の人の社会参加の取り組みでは、認知症になったら何もできないというような、これまでのイメージを変えたいと考えている。認知症の段階によってできることが変わっていくが、認知症になってもできる部分があると考えている。いろいろな考えがあると思うが、市が取り組みたいものは、認知症になっても状態に応じて自分が希望すること、自分が活躍できる場を実際に創出することだ。その活動を広く市民の方々へ周知し、知った人が少しでも認知症の人の理解を深めたり、行動につながっていくと良いというのが今後の考えだ。その内容について意見をいただきたい。

〈糟谷委員〉私は高齢者はみんな認知症になると思っている。高齢者のうちから社会的孤立

を避けるような施策が必要だ。認知症と介護予防が別々ならば、合わせたらいいと思う。縦割りになると画期的な調整ができないと思う。今回、医系の市長が就任予定の為、そうした施策が実施されることを期待したい。

〈中谷会長〉 今回の取組みに参加している人はどうやって募集したのか。

〈事務局〉 認知症の人がやりたいことを実現するためのワークショップを開催した。内容は認知症の人にやりたいことを聞き、みんなで議論し、どうやったら叶えられるか検討した。ワークショップの参加者は公募や直接声掛けした方たちである。ワークショップの内容を周知し、希望者が参加している。

〈中谷会長〉 さらに広く周知する仕組みが必要だと思う。

〈事務局〉 現在は、各支援センターからの紹介や、市とのつながりを活用し、やりたいことを実現しようと、情報を共有しながら進めている。

〈糟谷委員〉 認知症の人の多くは、家から一歩も出ないのが現状だ。出てくる人は本当に素晴らしいと思う。だから、私は高齢者のうちから何か参加できるところがある方がいいと思う。認知症と高齢者の差はなく、一緒だ。私もそのうち認知症になるし、ここにいる人も、みんな認知症になる。

〈事務局〉 先日、やりたいことを認知症の当事者の人と話した。何がやりたいかといきなり聞かれても、なかなかすぐ出てこないという話をいただいた。ただ、市の方から、当事者や地域の人が面白そうじゃないかと興味を持てるように取組の周知を行えば、当事者の人のやりたいことを引き出せるという声もある。当事者の声を広く届けるようにして、市民の皆様と活動できるようにしたい。

〈長谷川委員〉 私自身は認知症の人が何もできないとは思っていない。実際に私はしっかり話をし、声を聞き、その方の真なる望みや思いを確認しながら、やりたいことを一緒にやりたいと思っている。日々、ケアマネージャーは皆そういう形で動いている。おそらく支援センターの職員も同様ではないか。認知症の当事者の意向や希望を聞きながら進めるのは非常に必要かと思う。ここは認知症施策推進協議会の場合なので、高齢者全般については高齢社会総合審議会などで決めればよいと思う。一部、個人的な意見としてだが、例えばキャッチボールを、ネイチャーのチーム内での活動に限定すると活動の先細りが懸念される。例えば民間少年野球チームやスポーツクラブに活動の投げかけや周知をするのはどうか。カードゲームや裁縫も、素人のものより本気で活動している人がいっぱいいる。そういう団体に相談や活動のサポートを依頼するのはどうか。そこから参加してもらう方が、先の展開があるかなと思う。市内の手芸店等では作品展をやっているところもあり、活動の継続性を考えると、繋げていくことが必要だと思う。この事業は専門職でもやっていることはほとんど知られていないので、周知をしてほしい。

〈宮地委員〉 認知症と言っても、能力はまちまちだ。私は病院で勤務しているが、病院では確かに動けず、食事もできず、身体に管が入っている人もいる。一方でこのように活動もできる認知症の人もいる。認知症と一括りにし、同じ施策で事業を行うには無理がある。こう

して社会参加について参加者の制限が必要かどうかの議論があるのも、認知症は幅が広いということを押さえておかないといけない。

〈中谷会長〉非常に難しいところだ。税金を使い実施する事業はやはりある一定のラベルを貼らないといけないこともある。

この社会参加のグループも、先ほど長谷川委員が話したように、壁を作ってグループ内であるのではなく、少し広げるようにしたら、新しい展開が見えてくるのかもしれない。

〈星野委員〉

すぐに住民主体は難しいため、転換していくためにはサポートが重要だ。高齢者支援センターでは頑張って活動している団体の、声をかけやすい人に周知し、一緒に活動することが多い。例えば介護予防サポーターの養成講座やイベントの際に、どうしても人が足りないと、介護予防サポーターに声をかけて参加を依頼している。先ほどのキャッチボールにおいても、市民と一緒に呼び、興味のある市民を募り広げていくというところが現実的かと思う。どのように市民に向けて広報活動をしていくのかというところが、一つポイントかと思う。

〈事務局〉様々な事例を広く市民に周知し、活動に参加してみたい人が参加できるように、市としても広報やホームページといった手段を検討し周知をしたい。

〈内山委員〉自治会で回覧板の中に、警察の詐欺のチラシは何度も回ってくるが、認知症に関する資料は少ないと感じる。私は会議の参加や誘いがあることで、参加するチャンスがあるが、そういうチラシがないと周知が難しい。自治会の中でもお助け隊や、自主活動グループに参加している元気な高齢者は、認知症に関してもすごく興味を持っている印象を受けるので、チラシの配布に協力を仰ぐ方法もあるのではないか。

(4) 認知症の人の家族等への支援について

【資料6】

・説明 〈事務局〉

・質疑応答

〈宮地委員〉認知症と言っても、症状の程度など幅広いと感じている。家族介護者の会の対象者は入院している方なのか、在宅で生活している人なのか。

〈事務局〉

今回の家族介護者交流会は、対象者の方は特に限定はしていない。関係者と検討する際に、まだ軽度の段階から症状が進んだ方の介護者の話を聞く事で、準備や学びになるといった意見があった為、色々な段階の方がそれぞれの立場や状況を話し交流することを目的に今回は実施する。全ての家族が何かしらの悩みを持っているので、重症度にかかわらず、今回は市庁舎に来庁できる方に限って実施する。今年度の実施内容を踏まえ、認知症の段階を分けた方が為になるなどの、意見があったら検討したいと思う。

〈臼井委員〉交流会を開くと、気軽に話し相手が欲しい、あるいは自分の気持ちを打ち明けられるような場を求めている方もいると思うが、実際話を聞くと、専門的な関与が必要な事例や、非常に複雑で困難な事例の方も少なくないと感じる。そうした相談の時に、どうスミ

ースにその先に繋げていけるかを考える必要があると思う。

〈事務局〉新規事業だけでなく、既存のサービスにどれだけ円滑に繋げていけるかも重要だと思う。今回の交流会で得た経験をもとに、既存のサービスにスムーズにつなげていける検討も併せて行いたい。

〈星野委員〉参加人数は何人くらいを想定しているか。

〈事務局〉60名程度が入る部屋を会場として用意している。当事者の方が一緒に来られるというところを、今回の交流会のポイントと考えており、家族介護者の方2、30名、当事者が5、6人くらいを想定している。あとは支援者や当事者と共に過ごすメンバー、認知症サポーターもいるため、合計で60名位と見込んでいる。

〈星野委員〉この交流会のアンケートを当たり障りのないものにしてほしくない。アンケートの結果を地域の高齢者支援センターや地域活動で引き継げたらいいと思う。どの時点でどんな交流会があったらよかったとか、どんな窓口があったら、どの時点で実は相談をしたかったとか、といった幅を広げたアンケートになればよいと思う。アンケートに関して、認知症地域支援推進員宛に連絡いただければ、具体的に各々のセンターでどんなニーズがあるか、こんなことを聞いてほしいといった意見が出せる。家族介護者交流会に関しては、どのセンターも苦戦している状況があるのではないかと思う。

〈事務局〉市としても高齢者支援センターと一緒によい事業にしていきたいと考えている。アンケート内容は、今の意見を踏まえて検討したい。家族会の井上委員にも協力いただき、意見を聞きながら進めている。

3 その他

(1) 認知症疾患医療センターの2025年度実績報告について 【資料7】

- ・説明〈村山副会長〉
- ・質疑応答
なし

(2) 各委員からの報告 【資料8】

- ・説明〈栗田委員〉
認知症条例の策定について説明
- ・質疑応答

〈浅沼委員〉

町田商工会議所の商業部会部会長という位置づけで参加している。商工会議所には約4,000の事業所があり、商業、工業、飲食業、様々な業種がある。その中で、つながりという言葉キーワードにして活動している。認知症関連の活動を中心に、各企業のストロングポイントを活かして関わられる部分があると思う。認知症関連の活動をまずは各事業所に周知し、理解を得て、我々の会社であればこういうことができるといったように申し出てもらい、例えばイベントで企業が入り込むこともできると思う。まずは協議会の委員として各企業にPRしたいと思う。今はまだ委員会活動が始まったばかりで、ポータルサイトを立ち上げている。その中でDサミットの告知やボランティアの募集をしているが、まだ広がりや膨らみができると思っている。これからも高齢者支援課と密に交流しながら活動を膨らませられると良いと思う。

〈中谷会長〉条例を作ると今のように、様々な団体やグループを巻き込む根拠になることは確かではないかと思う。

〈土屋委員〉

自分が住んでいる市にこういう条例があることを知らなかった。町田市民も条例について知らない人は多いと思うので、ぜひ周知に力を入れてほしい。

〈中谷会長〉条例を作ると確かに宣伝と啓発は間違いなく効果的にできるかと思う。事務局の意見はどうか。

〈事務局〉市の方でも資料を基に、いくつか自治体の条例を確認した。条例の内容は認知症への理念や市の責務、また市民の役割等について掲げている内容が多く見受けられた。市では、2016年に認知症の人やその家族、地域関係者など幅広いメンバーで話し合いを行い、認知症の人にとってどのようなまちであってほしいかを、自分の視点でまとめた「16のまちだアイ・ステートメント」を策定した。

この理念を広く市民と共有することで、認知症とともに生きるまちづくりを実現するための取組を推進している。一方で、現在の「16のまちだアイ・ステートメント」の認知度は、一般高齢者で約0.3%と低く、まずは、この「16のまちだアイ・ステートメント」の認知度の向上に向けた取組を推進していきたいと考えている。また、今回の協議会でも議題としたが、町田市は来年度以降、認知症基本法に基づいた認知症施策推進計画を町田市高齢者福祉計画、介護保険事業計画が一体となった「町田市いきいき長寿プラン」と一体的に策定していくことを検討している。現在のところ、直ちに条例の制定は検討していないが、こういった取組状況を踏まえながら、今後の条例制定等について検討していきたい。

〈中谷会長〉当事者委員として、意見や感想はあるか。

〈認知症である者②〉感想になるが、こういう会議というか打ち合わせというか、話し合う場が時々ある方が嬉しい。色々な方々が出席し、色々な意見があるのも参考になる。

〈認知症である者①〉私も色々な方々の意見を聞き、自分自身も何とかしなきゃなという気持ちを感じた。

〈中谷会長〉本日は、非常に活発な意見をいただいた。ありがとうございました。

〈事務局〉中谷会長、議事の進行をありがとうございました。糟谷委員から指摘があった、審議会でどのような計画、目標設定と評価をしているのかという内容について、紹介したい。例えば、現行のいきいき長寿プランでは、認知症の人も気軽に話し合える場である認知症カフェの開催箇所数を目標として挙げている。この目標は2024年が28か所、2025年は34か所としている。実績は、2024年は28か所となっており、進捗評価は「◎」となっている。その他、市民や仲間を増やした取組として、まちづくりワークショップを開催し、参加人数を目標値にしている。こちらも2024年の目標値が100人というところ、実績は109人、2025年度も目標は100人と前年度と同じにしているが、達成できそうな見込みだ。このように、目標値に対して110%の実績値であれば「◎」、目標値に対して90%以上110%未満の実績値であれば「○」、それ以下であれば「△」と表記されている。数的目標やアウトプット指標や、アウトカム指標を定めながら審議会で評価しながら、事業のPDCAを繰り返し、次期計画に活かして目標設定をしている。

4 次回の予定

第27回 町田市認知症施策推進協議会 2026年6月頃

今年度で、本協議会の委員任期が満了となるため、今後次期委員の推薦や承諾に関する手続きを行っていく予定である。